

日本の悠久の歴史をひもとけば、そこにはわが国を支えてきた「なでしこ」たちの存在があります。福岡の人気歴史家・白駒妃登美さんに、そんななでしこたちの知られざる歴史物語を紹介していただきます。

しらこまひとみ
博多の歴女 白駒妃登美

✿ はるばる熊本から松坂へ

前回は、江戸後期の国学者・本居宣長もとりのりながを育てた母親の物語をご紹介しました。今回は宣長に憧れた、名もない少女のお話です。数年前、本居宣長記念館（三重県松阪市）を訪れた時、私が福岡から来たと申し上げると、館長さんが喜んでくださり、「九州ですか、熊本には帆足京ほあしきやうという少女がいますね」と京のお話をしてくださいました。出版技術の発達していなかった当時は、学問の志ある者は「写本」するしかありません。当時十五歳だった京は、国学者である父と共に、熊本の山鹿やまがから伊勢松坂まで八百キロを三十日もかけて歩き、宣長を訪ねました。出発したのが四月、帰郷は十一月ですから、さぞ大がかりな旅だったことでしょう。

人は輝かせながら、輝く ——本居宣長を輝かせた女性たち②

✿ 幸せなひと時

前回お話ししたように、宣長の代表作『古事記伝』は三十余年を費やした大著です。京親子が彼を訪ねたのは、その大著が完成した二年後だったんですね。ここで私がすごいと思うのは、向学心に燃える無名の少女に対し、宣長は現物を無償で貸し出すんです。その宣長の厚意に対し、京親子は宿舎で筆写しながら、雨漏りの時には原本を抱え、大切に守り抜きました。

京は宣長への感謝の気持ちを和歌に込め、原本返却の際にはその短冊を添えました。その文字の美しさと和歌の出来栄できばえに感嘆した宣長は、彼女の才能を褒めたそうなんです。憧れの宣長から褒められ、京は天



帆足京 肥後国鹿本郡(熊本県山鹿市)の神職・帆足長秋の娘。父と共に本居宣長の門下生となり、(1787-1817) 15歳で松坂へ遊学。帰郷後は結婚相手と駆け落ちし、31歳で生涯を閉じる。

【イメージイラスト】
アオジマイコ